

A—35 農民殊に高令者の栄養摂取に関する研究

長崎県立女短大 ○赤星 千寿
井上 寿子
別当 和子

1. 栄養調査成績の検討については世帯を単位として考え、家族の摂取の実態まで把握されることは少ない。我々もこれまで農家の調査に成人換算値による世帯単位の成績を求めてきたが、その場合個人の換算率、特に補助労働者である高令者の労作の程度に問題があるとおもわれる。それで今回は世帯と同時に個人の調査をおこない、同一世帯内での加齢による摂取の変化、年代別の特徴を知り、高令者の摂取の実態を把握したいと考えてこの調査をおこなった。

2. 対象は長崎県下の農村 A, B, C の3地区205世帯とその中の20才以上の男女である。日時は昭和41年, 43年, 44年の7月中の3日間, 方法は調査員による秤量と質問によった。

3. 摂取栄養量は20才~40才まではほとんど差はなく, 男子は60才以後, 女子は50才以後に有意の差が見られる。また40才までを基準にした加齢による摂取熱量の低下を見ると, ほぼ所要量の低下と平行しているが高令になるほど所要量に近づいている。地区によりやや差が見られるが, これはそれぞれの世帯における高令者の作業の度合を反映していると思われる。同様にたん白質の低下についてみると高令になるほど所要量との差は大となって老人の摂取上の問題点を示している。次に熱量の摂取構成を見ると年代別は大差はなく, 同一世帯内では加齢により特別の食事選択はなされていないようである。